

2018年ワールドスタディ

西安・北京を訪ねて

本学科教員 鄧 捷

8月の酷暑の中で名著『長安の春』の格調高い文章と苦闘し、慣れない中国語の歌「信天遊」（陝西省の民謡調の流行歌）を覚え、9月3日に学生11名は引率の先生2名とともに中国の西安へ飛んだ。1200年も前に阿倍仲麻呂や空海などの遣唐使が足跡を残した古都西安（長安）は、もうすっかり秋の季節だった。

9月4日に秦の始皇帝陵の兵馬俑、イスラム教徒の礼拝処「清真寺」と「回民街」（イスラム人街）、5日に唐の高僧義浄がインドや東南アジアから持ち帰った仏経を翻訳した場所として有名な小雁塔、西安博物院、「中国最大の石造の書庫」と称される碑林博物館、西安事変の主演張学良の公館、6日

に『西遊記』の三蔵法師として有名な唐の高僧玄奘がインドから持ち帰った仏経や仏像を保存するために建立された大雁塔、そして西安の名門の一つである陝西師範大学を、それぞれ訪問した。数多くの名勝古跡、「びんびん面」などの小麦文化が紡ぎ出す多様な食べ物を堪能したのである。陝西師範大学で日本語を勉強する学生たちと交流会を開き、互いに自国文化を紹介し、日本から持参したお菓子や漫画、雑誌で盛りあがった。大雁塔の上からのぞく、かつての長安を彷彿させる西安の整然とした街並み、師範大の学生たちの流暢な日本語と真剣な眼差しは、深く印象に残ったことであろう。



西安 大雁塔



西安 陝西師範大学の学生との交流会

9月7日に中国の新幹線で首都北京に移動した。翌日に、北方遊牧民族の南下を阻止するために秦の始皇帝から建設が始まり、いくつもの王朝によって修築が繰り返された万里の長城、明の13代の皇帝や皇后などの陵墓群（明の十三陵）の中の定陵地下宮殿、最終日は中国の政治的シンボルである天安門広場、紫禁城と呼ばれた明清朝の王宮だった故宮博物院、皇帝が天に対して祭祀を行った場所の天壇、多くの老舗が残る歴史的な商業地区の前門を、それぞれ訪れた。

現在首都でもある北京は古都の風格を漂わせながら、至る所で荷物チェックがあり、要人が通るたびに足止めされるといったような、権力の

パワーが漲る都市であった。学生が下町の繁華街前門で買ったおもちゃの「パチンコ」は、天安門広場の入場口で「危険物」と見なされて没収されそうになり、菅野先生が電光石火のような手さばきでパチンコを分解し、若い警察を黙らせ、天安門広場に持ち込ませることに成功した出来事は、権力と賢く共存する庶民の都でもある北京を象徴する出来事として忘れ難いものである。

西安北京を訪ねる前に「反日」か「親日」という内気な基準で中国を見がちな学生たちが帰国後に提出したレポートは、中国を多様な視点で観察し、さらに中国を通して日本を見直そうとする内容が多くあった。以下は学生のレポートからいくつか抜粋する。

秦の始皇帝について認識を深めた

坑内の兵馬俑は、秦の始皇帝の葬送の軍隊を模写したもので、秦国軍隊の兵種・編制・戦闘方式・甲冑騎兵や兵卒の装備の研究に貴重な実物資料を提供していることがわかった。……秦の長城は土と石で築かれたが、明の長城は、煉瓦と石で築かれた。この万里の長城は、皇帝の権力によって完成された記念物であり、完成の為に、連年数十万の人力が投入された。その後、この長城は、これ以降の中国において中国と北族とを区別する境界線となったのである。

小寺巧真「始皇帝が遺した場所を巡って感じたこと」



北京 天安門広場にて

「清真寺」と「回民街」をみて中国の多宗教を考えた

初めての中国ということもあり、日本とは全く違う環境で、受けたカルチャーショックはとても大きなものだった。接客態度の酷さや、治安の良し悪しなどの、正直嫌な場面もあった。しかしその分、初めて外国のお金を扱っ



清真寺

たり、外国語を使って現地の人と会話をしたりと、普段全くできないような経験を積むことができたのはとても良かったと思うし、このことを将来に活かせるように過ごしていきたい。そして、中国が多宗教だということにもしっかりと触れることができたのも非常に嬉しかった。博物館でみた門の形をしたヒンドゥー教の石碑や、西安の町や清真寺等、イスラム教が中心だが、多宗教の状況について身をもって理解することができた。

畑陽介「西安清真寺を実際に見て感じたこと」

中国のセキュリティを見て日本の鉄道のセキュリティを考えた

日本と違い中国の鉄道は、新幹線の駅が独立しているため、スペースが広めに確保できるのである。……日本ももっと鉄道のセキュリティについて考えるべきなのは、と私は思った。今回の研修で、私は中国のセキュリティ強化策は素晴らしいと感じた。空港の様に厳重じゃなくとも、改札を通る際に荷物をX線にかけられる様にして、大まかな中身がわかる様にするなどを導入するのも念頭に入れていいのではと思った。在来線が無理でも、新幹線などの長距離鉄道などでは実施すべきだ、と私は今回中国へ行き感じたのである。

小池恵理香「中国のセキュリティについて」

中国の交通をみて日本の交通問題を考えた

シェアバイクの使用。中国では今電子マネーが流行っていて、なんでも wechat pay や aripay 払いの社会になっている。シェアバイクは携帯でキューアールコードを読み取って wechat pay や aripay で支払い、シェアバイクを利用することができるシステムになっている。このように簡単にシェアバイクを利用できるようになれば、自転車の盗難も少なくなり、これから東京オリンピックで日本はもっとたくさんの観光客が増えるため、利用者数も増えると思ったからである。……こうした普段日本では感じることや見ることができない光景を見ることができ、より一層自分の視野を広げることができた。今回のワールドスタディで、国と国の間にある価値観、人と人の中にある価値観に気づくことができた。その地域によって食べるものや雰囲気・習慣が違うため、考え方も違う。それらを現地で感じる事ができ、自分にとって貴重な体験にできたことを誇りに思っている。

佐藤由美「日本と中国の交通面の違い」

中国の発展とその矛盾を感じた

SNS 面などでは中国は wechat やそれに関連した電子マネーや制度がとても整っていると感じました。スマホさえあれば問題なく生活できる国であるなと感じました。ここに中国の勢いを感じました。ですが、これは決していい方法ではないとも感じました。日本では使える LINE、Twitter、Instagram 等々規制がかけられているものが多いなと感じました。そこで、矛盾を感じたことが一点あります。万里の長城の公式 Instagram、Twitter、Facebook、YouTube があったことです。これは、どれも中国では規制がなされていて閲覧することはできません。ですが、公式として世界へ発信する手段として利用しています。これは、このアプリが世界に対する発信力が大きいということを遠回しではありますが、中国の政府などにも認められているとも言えます。いくら共産党の方針であっても国民から世界へ発信するチャンスを奪うことは、これからの世界を支えていく中国にとって自分達を不利にする行為ではないか？と感じました。

多々良海斗「ワールドスタディに参加して」

中国人の「自由」を見て日本人の「ストレス」を考えた

私は中国の国家の政策である金盾という、インターネットの検閲・規制システムのイメージから勝手に、中国人は国に拘束されていて息苦しい状況の中で生活を送っている人々を想像していました。しかし実際に私が二つの都市を訪れて感じたことは、中国人はとても自由で楽そうだということです。どのような意味で自由で楽そうなのかと言いますと、それは中国に滞在中に多くの場面で感じたことなのですが、勤務中にスマホを触る人が異常に多いということです。……接客業をする人間が店舗に立って自分の世界に入ってしまうことは、日本人の価値観から考えるとあまり良いことではないのは確かです。……日本で働き接客をする従業員は勤務中に私用のためにスマホを触ることは許されていないと思います。私はその光景を見て、中国社会は日本社会よりも寛容で、接客をする人間の立場から考えると、勤務時間中ずっと気を張っている日本人よりもストレスの少ない社会だと感じました。

日本は現在、世界でも比較的に進んだ経済力を持った全体的に豊かな国です。そんな日本だからこそ抱える、中国にはまだない問題が多くあると考えました。その問題の一つが日本のストレス社会だと考えます。……中国のストレスのない働き方と日本の規律を重視した働き方は、どちらも正解であり、その国の特徴ですが、この中国と日本の社会の中間地点を取ることができる社会になれば一番良いと感じました。その中間の社会を創り出すことができるのは二者の慣習や思想、文明から文化まですべてを勘案することができる人間です。日本の社会問題に向き合ったとき、中国の社会様式を日本の社会に取り入れることは大変難しいことですが、実現したときには二者の関係性を明らかにして汲み取るという作業はなんらかの社会問題の解決の糸口になると考えました。

武内瑞樹「中国人と日本人の自由」

案外中国を「綺麗」と感じた

中国の町を歩いているとき、歩道などを見ると日本よりゴミのポイ捨てが少ないと思い町をよく見ながら歩いていたら、町の至る所にゴミ箱が置かれていた。驚くほど多くあり、日本にももっと多くのゴミ箱を街中に置けばポイ捨てする必要もなくなり、町が綺麗に保たれるのにと考えた。正直、中国はあまりきれいな国ではないと勝手に思い込んでいたので、今回見た町の状況に対して日本よりも良いと個人的に思った。

長渡強志「ワールドスタディにて学んだ日本と中国の文化の違い」

食文化の違いを味わえた

中国も箸文化であるため、食べ方についてはあまり困らず過ごすことができました。しかし、箸は日本の箸より長いように感じました。それは円卓の中央まで箸が届くために長く作られているのだと、使用してみても初めて分かりました。テーブルは円卓であったが、それもまた、中国独特の雰囲気非常に楽しく食事をすることができました。また、水が白湯であるのが特徴であると感じました。理由としては、白湯は健康に良いというからだを知り、中国国内の健康意識が非常に高いと感じることができました。日本では温かい飲み物はお茶と蕎麦湯くらいしかイメージできません。であるため、非常に新鮮であり、文化の違いを肌で感じる事ができる一つの出来事であったと思います。



徳発長にて餃子を食べる

水井聖哉「中国の食文化」

中国でよく目につくのが果物屋さんです。売っている内容はドリア、ドラゴンフルーツ、桃、梨などが主でした。ほかに、「ナツメ」「ホオズキ」など、中国オリジナルといえるものがありました。ナツメは5～6センチほどのリンゴのような果物で、皮の色が茶色に熟すと食べごろになります。リンゴのような風味とほんのりと甘く、食感もリンゴと似ています。

鈴木達也「中華料理 本場と日本の違い」

日中友好を考えた

中国にいる日本人は凄く少なく、日本人より日本語を学んでいる人の方が多い、西安では日本人は約300人しかおらず、北京や上海などの経済発達の大都市でも10000人ぐらいしかいないと聞き、とても驚きました。なぜなら中国は日本の隣国なのに、在住している日本人の数はアメリカやオーストラリアに比べてかなり少ないことが分かったからです。それは中日関係がまだあんまり良くないからではないかと思えます。……関係改善にむけては、特定の政治家に限らず、ビジネスマンや旅行者など一般の国民同士の交流も含めたあらゆるレベルでの対話を積み重ねていくことが、遠いようで一番の近道かと思えます。

薛項坤「中日関係を改善していくために」